

高2 東大 国語



出典：河合進雄『人間科学の可能性』／九州大学 教育・法・経済学部 99年・改題

文章略解

現象を、それを構成する要素に分割し、それぞれの要素の運動法則を捉えることによってもとの現象を説明しようとする自然科学は、めざましい成果によって人々の現実認識を変えたばかりでなく、その論理実証性という普遍性の高い方法論が他の分野の研究のモデルともなった。しかし全体的存在としての人間の研究に際しては、自然科学的な態度や方法が必ずしも有効であるとは限らない。むしろ研究者自身も一個の全体的人間として対象と接するほうが良い結果をもたらすことも多い。

解答

問1 対象を要素の集合体と捉え、主観を排して各要素の運動を観察することから導き出された、実証可能で普遍性の高い法則による世界の解釈。〔63字・解答例〕

問2 宗教における正邪の判断は、特定の教義を信ずる信者の信仰心に依存するものであり、教義の違う他の宗教の信者がそれを共有しているわけではないから。〔70字・解答例〕

問3 総体として存在する人間自体の研究に際しては、対象を要素に分解して要素ごとの運動法則を捉えようという姿勢よりも、自らも主観を持った全体的人間として対象と相対する姿勢のほうが有効だから。〔91字・解答例〕

出典：中村雄二郎『臨床の知とは何か』／オリジナル問題

文章略解

シデナムは医学の指針を経験に求めた反面、イギリスの経験論の影響を受けて理論の組織化を図ったため、〈近代のヒポクラテス〉と言われる。永い間、医学では見ることと知ることが均衡状態にあった。ところが、医学的経験が一つの体系に組織された際、観察の代わりに哲学が導入され、盲目の知と呼ばれる状況が生じた。その結果さまざまな学派が四分五裂したが、臨床医学だけは体系を否認し、経験によって自己の真理を積み重ねていった。

解答

問1 シデナムは臨床観察による正確な記録を残した点でヒポクラテスに通じるが、近代的な理論の組織化の傾向もあったから。〔55

字・解答例〕

問2 病理学として論文に書かれ体系化され一つの知となり、医学は見ることと知ることとの平衡を失い墮落したということ。〔55

字・解答例〕

問3 字義のとおり、自分の目での臨床観察に基づくことのない、観念的な、理論上の知識体系のレベルだということ。〔52字・解

答例〕

問4 病理学とは別の、自己の臨床観察の体験から得られた真理を積み重ねてきた伝統ということ。〔42字・解答例〕

問5 a 〓 否心

b 〓 両義

c 〓 放棄

d 〓 保証

問1 冒頭の一文に「〈近代のヒポクラテス〉」という語が出てくる。「シデナムはしばしば〈近代のヒポクラテス〉とか〈イギリスのヒポクラテス〉とか、言われてきた。だが、医学的臨床の観点から見るとき、いったいどこまで、彼をヒポクラテスになぞらえることができるだろうか。」——これは問いであり、それに対する考察が、続く第二段落第三段落で展開される。第二段落は、「このような症状の正確な記述こそ、シデナムがヒポクラテスになぞらえられる所以であろう。」と締めくくられるとおり、「ヒポクラテス」との共通点について。第三段落は、「彼がヒポクラテスとちがっていたのは」から始まるとおりに相違点について。この兩段落を、第四段落冒頭「このように」という指示語で受けて、「たしかにシデナムの臨床医学は、いろいろな点でヒポクラテスのそれに近いものをもっていったが（合第二段落）、彼もやはり〈時代の子〉として、近代的・イギリス経験論的に理論の組織化の方向を歩んでいた。（合第三段落）」と続ける。更にこれを「その点で」で受け、「彼はまさしく、〈近代の〉ヒポクラテスであり、〈イギリスの〉ヒポクラテスであったのである。」と結論づける。第四段落は、まさしく第一段落の問いに対する解答を述べるものとなっている。

以上の構成を踏まえた上で、傍線部の「〈近代の〉」の部分はヒポクラテスとの相違点を、「ヒポクラテスであり」の部分は共通点を簡潔にまとめればよい。

問2

この傍線部のある同じ第六段落で「すべての空しい信念や、あらゆる体系が現われる以前に、医学は全体として、苦痛とこれを和らげるものとの間の直接的な関係のうちに存在していた。」「一つの知になる以前に、臨床医学は、人類の自己自身に対する普遍的な関係であった。これは医学にとって絶対的な幸福の時代である。」とある。これらの記述と傍線部とを結び付けると、左のようになる。

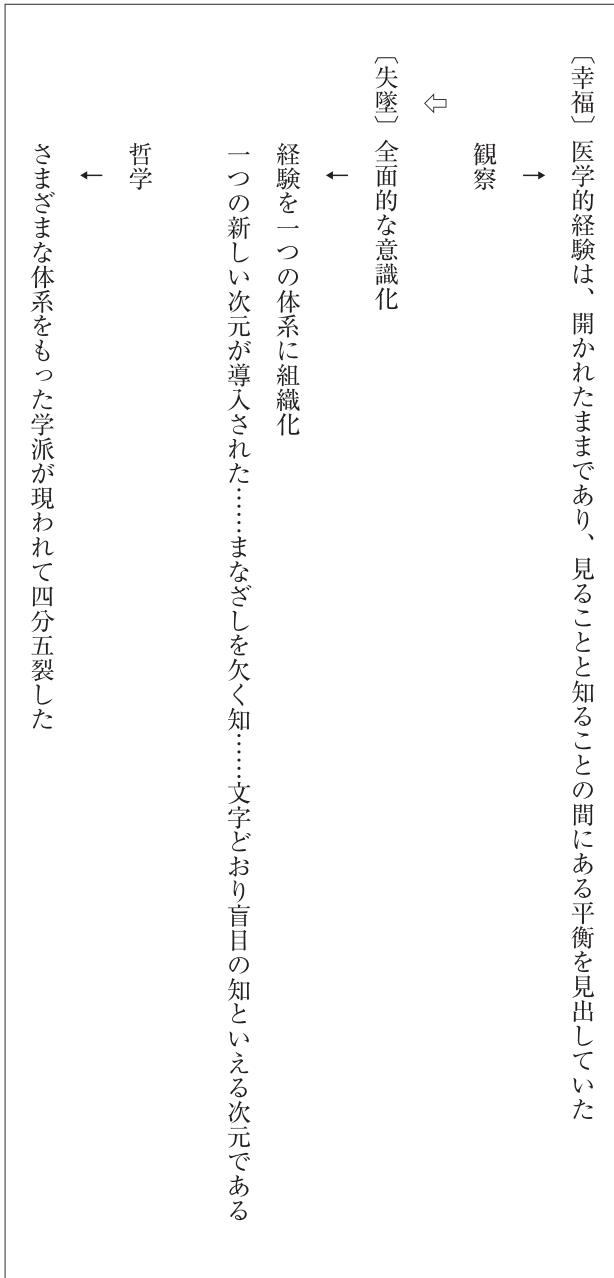
〔幸福〕 医学は全体として、苦痛とこれを和らげるものとの間の直接的な関係のうちに存在していた。
臨床医学は、人類の自己自身に対する普遍的な関係であった。



〔失墜〕 文字と秘密がつくり出される

すべての空しい信念や、あらゆる体系が現われる
一つの知になる

このことは、続く第七段落冒頭「いいかえれば」によつて、繰り返される。即ち、「永い間、医学的経験は、開かれたままであり、見ることと知ることの間にある平衡を見出していた。それが誤謬からその経験を守つたのだ。」が、「幸福」の時代である。一方第八段落「だが」から話は「失墜」へと転じられる。「だがそのとき、この経験を一つの体系に組織化し、学習を〈容易にし〉、〈要約し〉たのであるから、医学的経験のうちに一つの新しい次元が導入されたことになる。つまり、まなざしを欠く知なので、文字どおり盲目の知といえる次元である。《ヒポクラテスが医療を体系に還元してしまつたあととは、観察が放棄され、哲学がそこに導入された》と言われる所以である。その結果、さまざまな体系をもつた学派が現われて四分五裂した」これが、「失墜」である。以上を第六段落同様にまとめると次のようになる。

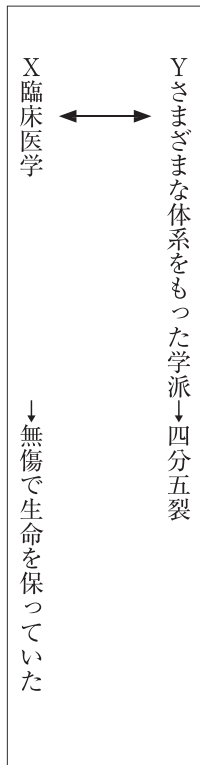


また、第九段落の「臨床医学」対「病理学」や、問1でみた「ヒポクラテス」対「近代」の対立関係を、この「幸福」対「失墜」に重ねてみて参考にしてもいいだろう。右に見たようなことから、「失墜」の項をみて「文字と秘密」を考えることになる。「文字」とは言語化であり、主に書物により机上で論理的観念的に考察する研究方法と結びつく。「秘密」はそこから見出される、組織化された体系等をさす。「見ること」が失われ、「知ること」だけに偏向してしまったということだ。

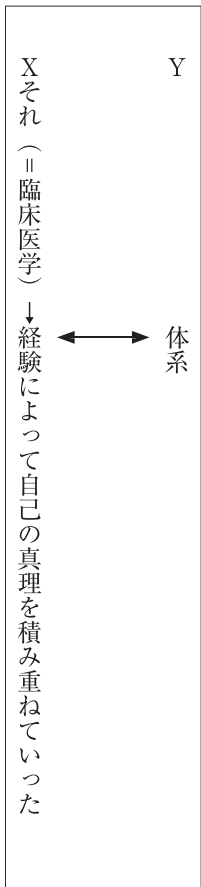
問3 解答の根拠となる文章構成は、問2で見たとおり。直前の「まなざしを欠く知」や、後の「観察が放棄され、哲学がそこに導入された」を中心に考える。医者が自らの目で患者の症状等を臨床観察することを欠いた、理論的な考察だけの次元、ということだ。

問4 第九段落の文章構成を見てみよう。

「さまざまな体系をもった学派が現われて四分五裂したが、その背後に、臨床医学だけは無傷で生命を保っていた。」



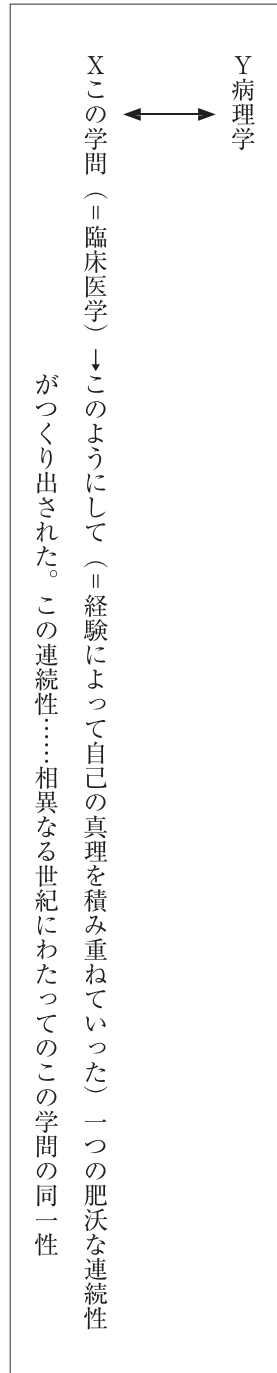
「それは、したたかに、体系を否認する経験によって自己の真理を積み重ねていった」



「このようにして一つの肥沃な連続性がつくり出された。この連続性こそが、病理学に対して、相異なる世紀にわたってこの学

問の同一性を保証したのである。」

←



以上の三つの図式を重ね合わせて、X・Yの対立の構図からXの要素として傍線部を考えてほしい。具体的には、直前の「このようにして」という指示語の受ける内容が第一に重視される。

【添削課題】

出典：竹内啓『近代合理主義の光と影』／東京大学 81年

文章略解

日常的合理性を支える基礎の一つはバランス感覚である。最近、生活の変化の加速化と情報の過剰な氾濫により心理的な対応が不可能になり、「遠近法」についての感覚も混乱している。遠ざかるにつれての関心の減少は、適当なものでなければならぬ。また、遠近法はその視点が動きうることも前提としている。「近代科学」は、無限遠点に視点を置いて完全な普遍性を達成しようとしたが、各分野に空虚な「一般理論」の失敗の例は多い。

解答

問1 過剰な情報の受容によって、それらと自己との関係の深淺が把握できなくなり、自己の視点から捉えた世界像に対する信頼が揺らいでしまうということ。〔69字・解答例〕

問2 自己と深く関わる事柄であるほど強い関心を持つが、同時に関係の薄い事柄についても無関心にはならず、自己中心的な独善に陥らないようにするということ。〔72字・解答例〕

問3 近代科学の普遍性への希求に反し、個々の立場や視点の置き方の違いによって、世界に対する理解には差異が生じるものであるということ。〔63字・解答例〕

特別問題

文章略解参照〔200字・解答例〕

文章略解

世界との無垢な交通を行う息子。その世界は、私達には失われているし、息子もまた大人になる時に失う。そのことの自覚が痛かった。私達は、世界とのこうした交通を、学問や芸術といった迂回路を通じてしか回復できない。が、このような活動は「学問」や「芸術」とは呼べない。「個性」や「知識」といった価値基準に囚われる「芸術家」や「学者」を置き去りにして、普通の人々の間から、共同的な交信回復の営みが生まれつつある。

解答

問1 息子が、幼児期特有の、ひたむきで無垢な、世界との共同的な交信を行なっている、ということ。(44字・解答例)

問2 世界との共同的な交信回復は学問や芸術によるしかないが、それはもはや、学問や芸術とは呼べないから。(48字・解答例)

問3 専門家以外の生活者が、従来の価値基準に囚われぬ、自分と世界共々の魅りを実現しつつある、ということ。(49字・解答例)

解説

問1 傍線部Aを含む第一、第二段落は、記憶の中の一場面を、例として読者に提示している部分である。その例に対する説明が、第三段落でなされている。

冒頭の「子どもの所作に触発された私たちの思いは平静ではあり得なかった。」の「子どもの所作」が、傍線部Aを受ける。それによって「私たちの思いは平静ではあり得なかった」のはなぜか。これを説明するために、まず「子どもの所作」の意味するところを述べていくのが、これに続く部分である。すなわち「一瞬、光の乱舞に包まれて、無心にさし出された手は、世界とのひた

むきな無垢の交通を告げていた。世界は、この子にとっては生きていくが、私たちにっては失われている。この子が大人になるときに、この子もまたそれを失うはずだ。」という箇所である。そして、「そのことの自覚が、私たちには痛かった。」と、「私たちの思いは平静ではあり得なかった」ことの理由に結び付けている。

さらに、この「世界とのひたむきな無垢の交通」が本文17行目「そのような世界との交通」、21行目「幼児期の根源的共同性」、文章末尾傍線部ウの中の「共同的な交信」などと受け継がれていく点にも着目していく。

問2 傍線部イの直前の「だが」という接続語から出発する。「だが」の前に「一つめの屈折」が述べられていて、それを受けての傍線部イ「もう一つ」の「屈折」という訳である。

まず「一つめの屈折」についてだが、これは、問1の説明で挙げた箇所の直後、「そして」から始まる。つまり「私たちが期せずして一致した思いは、そのような世界との交通を、何と遠まわりしてでなければ回復できないところにまで私たちは来ている」とか、ということであった。自分と世界ともどもの甦りの迂回路に、妻は舞踏表現を思い浮かべ、私はそこに社会科学の営みを考えていたのだ。」という部分である。これを受けての「もう一つ」の「屈折」は、傍線部イ直後から説明される。「ニーチェのメタファーを借りれば、駱駝、獅子を経ての小児への人生の回帰、あるいはワロン流というなら幼児期の根元的共同性への回路に、私たちが見出そうとしている活動は、もはや『芸術』と『学問』の名において呼ぶことができない類のものである。もしそれを『芸術』『学問』というとしたら、それは過渡的で便宜的な文化的惰性態にすぎない。ましてこの回路に立つ者を、『芸術家』と『学者』という種族に限定することはできないだろう。」という部分である。

問3 まず「普通の人々の間から……」云々という、傍線部ウ前半を考える。これは、直前に「……『芸術家』と『学者』を後方に残して」とあるように、「芸術家」や「学者」との対比で考える。その際、第四段落で、問2の解説で挙げた部分の直後に「『芸術家』と『学者』のイメージには、芸術院やアカデミズムに親しい意味論の世界がまつわりついていて、普通の生活者の間に現在生れつつあるものを捉えきれない。」と書いてある部分に注目する。「普通の人々」とは、こうした「普通の生活者」のことだ。その後、

「『芸術家』や『学者』の専門家としてのあり方の実態が述べられている。

続いて、「新たな感性と理性の錬磨」の部分だが、これは、第五段落冒頭の一文「ところが今日明らかになりつつあることは、

『芸術家』や『学者』がひそかに依拠し、そこから密輸入してきた普通の人々の価値基準の方が変わってしまい、『芸術』も『学問』もかつてそうであったようには自明的に成り立たなくなった、ということである。「かつて」の「価値基準」とは違うもの、ということだが、この「かつて」の「価値基準」とはどのようなものか。その後に「いつまでも『個性』と『知識』の名において特権を固守しようとし、『美の追求』と『真実の追求』の幻影にしがみついている『芸術家』と『学者』……」と書いてある箇所に基づいて考える。

最後に「共同的な交信回復の営み……」だが、これは、第三段落末尾の文冒頭の「自分と世界ともどもの甦りの迂回路」であり、第四段落冒頭の「ニーチェのメタファーを借りれば、駱駝、獅子を経ての小児への人生の回帰、あるいはワロン流にいうなら幼児期の根元的共同性への回路」のことである。

出典：『伊勢物語』 第九十四段 / 東京大学 前期 90年・改題

現代語訳

昔、ある男がいた。どういう事情があったのであろうか、その男はそれまで通っていた女のもとに通わなくなってしまった。(女の方には)その後別の男ができたけれど、(前の男とは)子供をなした仲であったから、親密にというほどではないが、時々は^{*}便りをよこしていた。(ある時、前の男が)女の所に、(その女は)絵を描く人だったので、絵を描いてくれるよう使いをつかわしたが、ちょうど今の男が来ているからと言って、一日二日描いてよこさなかった。(すると)前の男は、「まったく薄情な。私がお願ひ申しあげた絵を、今まで描いてくださらないので、それをもっともだとは思いますが、やはりあなたを恨みたいような気になりました」といって、からかって詠み、送った歌。季節は秋であった。

秋の夜は……別の男と一緒に過ごす秋の夜は、私と過ごしたあの春の日のことなど忘れるほどのものなのか。春の霞にくらべたら、秋の霧の方が幾重にもまさって感じられるのだろうか。春の霞にくらべたら、

と詠んだのであった。女の返歌。

千々の秋……たくさんの秋をあわせても、一つの春に對抗できましようか(ひとつの春にはかないません)。(けれども)秋の紅葉も、春の花も、どちらも散ってしまうものです(「あなたの方が素晴らしい人と思っていますが、所詮、二人とも私から離れていく存在なのですよ」)

〔訳注〕

*便りをよこした——「男から女への便り」「女から男への便り」両方の解釈がある。ここでは、「二人のやり取りが続いていること」を押さえる。

※テキスト3行目につきまして、以下のように修正した問題文（および解釈文）を掲載しました。

「かの男、いとつらく、『おのが聞こゆる……』とて」（東京大学入学試験問題）

↑

「かの男、『いとつらく。おのが聞こゆる……』とて」（本テキスト・解答） 【新古典文学大系（岩波）に拠る】

解答

問1 男がそれまで通っていた女のもとに通わなくなってしまったということ。〔解答例〕

男がそれまで通っていた女と疎遠になってしまったということ。〔別解例〕

問2 私が描いてほしいとお願い申しあげた絵を、いまだに描いてくださらないので、

問3 今の夫も前の夫も、所詮自分から去っていく人であるという、男の愛の頼りなさを達観する気持ち。〔45字・解答例〕

出典：『とりかへばや物語』(四) 冬の巻 「第三章 権中納言のその後」の冒頭部の一節 / センター試験 本試験 91年・一部改題

現代語訳

その日(「大将が二人の姫を都に迎える日」)になって、(姉君が新居に)お移りになる儀式はとでもすばらしく、中の君(「妹君」も(大将は)後にお残しになるつもりはないから、お連れ申し上げてご出発になる。女君(「姉君」)は、やはり、「さて、(これから)どうなることであろうか」と重苦しくばかりお思いにならずにはいられないが、父宮も、今後の身の振り方をご思案になっていて、「(あなたは)もうどうして再び戻ってこの庵を御覧になることができませんようか。私自身も、都に出て行くことのできる身ではございませんので、これが顔を見ながらお話をする最後でございましょう。(私は)長い間離れがたい束縛(「あなたたち娘」と関わり申し上げて、来世をたのむ仏道修行も自然とおろそかにしておりますが、これからは、一筋に仏道のお勤めができます身になりますから、とても嬉しいことですよ。）」と言って、お泣きになり、

行く末も……(大将につれて行かれて、幸せな)将来が遙かに続くにちがいない(あなたとの)別れにあたって、またお逢いすることがいつともわからない(のが悲しい)ことよ。

と言って、「今日は不吉な言動を慎まなくてはね」と、(涙を)拭ってお隠しになった。女君は、

あふことを……再会がいつともわからない別れ道では、行く(私の)方も、どちらの方角へ向かうのかもわからないほど、泣きながら出て行くのですよ。

と、袖を顔に押し当てて、ご出発にならない。妹君は、

いづかたに……(私は、父宮と姉君の)どちらに身を委ねたらいいのでしょうか。ここに残(つてお姉様と別れ)るのも、ここを出(てお父様と別れ)るのも、どちらも名残惜しい別れです。

(妹君)ご自身は必ずしも、急いで出発しなくてはいけない身ではないのだが、姉君に少しでも離れ申し上げては、たよりのない気持ちにするにちがいないのも当然なことで、父宮も、「このままこの機会に(妹君を)お移し申しあげて、私の方は、一途に思い残すことのない状態に(しておこう)」とお思いになって、しかるべき(「身寄りもなく、そのまま居残って後世を祈りながら余生を送るの

がふさわしい」年をめした女房などでさえも（庵に）お留めにならず、（姫たちと共に）出発させなされた。

大将殿は、姉君と同じ御車でご出発になる。出車十台、童、下仕えなどまであとに続き、この程度の草庵から御出発になるご様子としては、大層堂々として威勢が強く、しかるべき（＝相応の、りっぱな）殿上人が、五位、六位などまで非常に多くお供している。女房も、縁故を求めて感じのいい人たちを探し出してはお仕えさせた。妹君の御車は、（姉君のよりも）少し遅れて（続き）、出車三台程が（その後に）続き、これもしかるべき（＝相応の、りっぱな）人や前駆の人たちなどを沢山引き連れて進み、年寄りたち（＝先程の老女房のこと）は、この御方（妹宮）付きの女房となってこっそりと参上するのだった。父宮は、とてもうれしく、（待っていた）甲斐があるとお見送り申し上げになる。（父宮は）名残なく澄んだ気持ちになり、（一人取り残されて）心細く思ってしまうものの、（今まで）熱心に仏道修行しあそばしていたので、とてもうれしく、年来お思いになっていた（娘を縁付けることと、みずからの遁世という）ご希望が、叶えられたようなご気持ちにおなりあそばした。

解答

- 問 1 (1) ㊦ (2) ㊦ (3) ㊦

- 問 2 (エ) 問 3 (オ)

- 問 4 (カ) 問 5 (エ)

- 問 6 係助詞 問 7 (ウ)

解説

問 1 辞書義を問う問題。

(1) について。「具す」は、漢語の動詞「具」をサ変動詞化して和語としたもの。だから、漢語と同義の「〜が備わる」「〜を備える」が第一義で、人や車を動作の対象とする場合、「〜に従う・同行する」、「〜を連れていく・従える」という意味になる。

(2) について。「ほだし」は、「人の身の自由を束縛するもの」が辞書義だから、傍線部(2)を直訳すれば(ア)になるが、(イ)・(オ)でも通じ
るような気もする。そこでこの「去りがたきほだし」が何を表現しているのかを考えてみる。この語句は、4行目の父宮の言葉の中
で使われているが、その前後の内容に着目。父宮は、「年ごろ去りがたきほだしとかかづらひく、後の世の勤めも、く懈怠し侍りつ
るを、今よりは、一筋に行ひ勤め侍るべきなれば、いみじうなむうれしかるべき」と、長い間、「去りがたきほだし」と関わりあっ
ていて、来世の往生を祈る勤行を怠っていたが、これからはできるようなのでうれしい、と言っている。本文前の説明部分から、
この話が、これから二人の姫君が新居に移ろうとしている場面であることを考えれば、父宮が長年関わりあって、ついつい仏道修行
を怠ってしまった「去りがたきほだし」とは、「父宮の二人の姫君」のことであろうと想像がつく。すると、(イ)、(ウ)は該当しないこ
とがわかる。また、父宮の言い方では、「去りがたきほだし」は、プラスの意味でとらえられてはいないから、(オ)の「固い結び付
き」もあてはまらない。残った(エ)については、「去りがたき」とは、「立ち去り難き」の意で、「消し去ることのできない」という訳
にはならないので×。

ちなみに、「ほだし」の原義は、「馬の足にからませて、歩けなくする綱」のことであり、ここから、「罪人の手足の自由を奪う刑
具」の呼称ともなり、中古では、「仏道修行を妨げるもの」の意で使われることが多い。また、「ほだし」が動詞化した「ほだす」は、
現在も、「この男の情にほだされて」などと使われている。

「仏道修行」には、「心残り」＝「現世への執着」が妨げとなる。来世への極楽往生を願い、そのためには肉親の情も邪魔なもの
と考える、当時の思想を理解しておこう。

(3) について。「めやすし」は、「目安し」で、「見た目に感じがよい」という意味である。

問2

(Ⅰ) は「体言に準ずる語句を作る」のだから、該当するものは、「べき」の下に、「こと」「もの」「とき」「ひと」等が省略され
ていると考えられるものである。(Ⅱ) は、「係助詞を受けて結ぶ」のだから、同文中の上の文節に、結びに連体形を要求する係助
詞「ぞ」「なむ」「や」「か」「やは」「かは」があるものである。(Ⅲ) は、「下の語を修飾する」のだから、「べき」の下に体言があ
るものである。

したがって、簡単な見分け方は、直下に用言か助詞・助動詞が接続していれば(Ⅰ)、文末にあれば(Ⅱ)、直下に体言が接続し
ていれば(Ⅲ)ということになる。

①は、直下に「なり（＝断定の助動詞）」が接続し、「べき」と「なり」の間に「心づもり」などの語が省略されていると考えられるから（Ⅰ）。

②は文末にあり、同文中の上に「かは」があるので（Ⅱ）。

③はセリフの文末にあり、上に「なむ」があるので（Ⅱ）。

④は直下に「別れ」という体言があるので（Ⅲ）。

⑤は直下に「も（＝係助詞）」が接続し、「べき」と「も」の間に「こと」などが省略されていると考えられるので（Ⅰ）。

⑥は直下に「老いしらへる女房」があり、「女房」という体言を修飾しているので（Ⅲ）。

問3

掛詞は、同音異義語を利用し、一語で二つの意味を表す技法である。具体的な事物の様子を述べているようにみせかけながら、自分の心理を述べる場合が多い。「あき（秋と飽き）」、「まつ（松と待つ）」、「ふみ（文と踏み）」、「よる（夜と寄る）」、「かる（枯ると離る）」、「ながめ（長雨と眺める）」など、慣習化されているものは覚えておこう。見つけ方は、まず和歌を直訳してみて、スムーズに流れていかない箇所、上の語意と下の語意に齟齬をきたしてしまう部分に着眼しよう。そこに掛詞が存在していることが多い。その語句の同音異義語を考えよう。

この和歌では、「なくなく」が、「出づべき方も無く」と「泣く泣く（ぞ行く）」の掛詞となっている。

問4

傍線部(b)の和歌は、本文の話の流れから、父宮とともに吉野に隠棲していた二人の姫君が、大将とともに都の新居に出発する場面、父宮と姉宮の和歌に比べて、妹宮が自分の心境を述べたものであることをおさえておこう。

ここでは、本文の和歌の区切れをおさえて、区切れごとの解釈を比較することで、選択肢をしぼっていく。

本文の和歌は、「いづかたに〜まし」でまず切れている。ここまでの選択肢の解釈を比較すれば、(ア)・(イ)、(ウ)・(エ)、(オ)・(カ)がそれぞれ同じである。「いづかた」は、「どちら・どこ」の意の疑問代名詞であり、「まし」は、上の疑問語を受けて、「〜しようか、〜したものでしょうか」といったためらしいの気持ちを表す語である。したがって、この二語のみを直訳すると、「どちらに（どこに）〜しようか（〜したものでしょうか）」になる。こう訳しているものは、(オ)・(カ)だけである。(ア)・(イ)は、「どこに出て行くのか、かわからないこのわが身」と解釈しているが、この解釈に直接該当する部分が本文の和歌になく、また、妹宮はすでに大将・姉宮と一緒に

に都にいくことになっていることが、本文前の説明文でも、本文1行目でも書かれているから、これはおかしい。(ウ)・(エ)は、疑問もためらいの意もないので×。

(オ)・(カ)の解釈の違いは、三句め以降を、(オ)では父宮と姉宮の心情とし、(カ)では、妹宮の心情としている。語法面から考えれば、「惜し」は人物の主体的な感情を表す語であるから、この歌の読み手である妹君の感情を表していると解釈するのが自然である。

また、この問4の解説の最初でも述べたように、この歌は、本文から、父宮と姉宮の和歌に込めて、妹宮が自分の心境を述べたものだと考えられるから、正解は(カ)になる。

問5 傍線部(c)という行動は、その前の、「宮も〜とおぼして、」から続いていることに着目。この「宮」とは、「吉野の宮」のことだから、この「おぼす」の内容が、解答の根拠となる。

「宮」は、ここで、「やがてついでに渡し奉りて、我は一筋に思ひ置く事なくて」と思っているが、何を「一筋に」思い、後は思い残すことのない状態にしておこうと考えているのであろうか。父宮の考えが書かれている部分を本文の他の部分から抽出してみると、4〜5行目に「年ごろ、今よりは、一筋に行ひ勤め侍るべきなれば、うれしかるべき」、また、19〜20行目で、「宮はく、一筋に行ひ勤めさせ給ひければ、いみじくうれしく」とあることから、それは、「仏道修行」であることがわかる。父宮は、仏道に専念するために、姉宮が大将を迎えられるこの時に、妹宮もさらには老女房までも自分の庵から出し、都に行かせるのだと判断できる。したがって正解は(エ)。残りの選択肢はどれも、本文に書かれている内容からは読み取ることができない。

問6 付属語の「なむ」には、「① 係助詞」と「② 終助詞」と「③ 強調の助動詞『ぬ』の未然形+推量の助動詞『む』の連語」の三つがある。Xの場合、「いみじう、なむうれしかるべき」と、「うれし」と「うれし」を修飾している形容詞の連用形ウ音便「いみじう」の間に入り、なくても文意が通じてしまうこと、さらに文末にある「べき」が、「べし」の連体形となっていることから、係助詞の「なむ」である。

問7 本文の最後に書かれている、都へ行く娘二人を見送る父宮の心情に着目しよう。父宮の思いは、「宮は、いとうれしく、かひある様と見送り聞こえ給ふ。名残なくかい澄む心地して、心細くおぼさるれど、一筋に行ひ勤めさせ給ひければ、いみじくうれしく、

年ごろおぼしつる本意、かなひ出でぬる心地させ給ふ」(本文19〜20行目)と記されている。ここで、二度出てくる「うれしく」に注目しよう。最初の「うれし」は、「かひある様」と見送って、こう感じているのである。つまり、二人の娘に幸せな将来が約束されたことに対する喜びを表している。そしてもうひとつの「うれし」は、「一筋に行ひ勤めさせ給ひければ、うれし」だから、この後、自分がやと仏道に専念できるようになった喜びを表している。さらに自分から離れて行く娘を見送る父宮の心境として、「心細くおぼさるれど」があることもみのがせない。

したがってこのふたつの喜びと、一抹の寂しさを表現している選択肢が正解である。

(ア)は、「やむをえず、二人の娘の養育にかかずらわっている」が×。父宮は、確かに仏道修行に専心したいと思っはいるが、だからといって、それまで、二人の姫宮をいやいや育てていたわけではない。

(イ)は、「上の娘くさせて、下の娘とく考えていた」が×。父宮がここまで詳しく考えていることを裏付ける根拠が本文中にない。
(エ)は、「しいてく寂しさを感じている」が×。宮は、これからは、来世での往生だけを祈ることができることをうれしく思っている。娘との別離をこれほどは悲しんでいない。

(オ)は、「長年仕えなれた女房たちもく行ってしまつて」が×。父宮が女房との別離を嘆く場面は本文には出てこない。

出典：『続古事談』／東京大学 89年

現代語訳

六波羅の太政入道（と呼ばれた平清盛）が、福原京を造営して、（その新京に主立った貴族たちが）みな移り住んでのち、たいそう時が経って、以前の（平安）京と新しい（福原）京とどちらが優っているかという判定をしようとして、（その当時まだ）平安京に残っている相当に身分のある人々を、（清盛が福原京に）みな呼び下したところ、（集められた）人々はみな清盛の（怒りの）気持ちを（買うことを）怖れて、思っていることはまったく口に出さなかった。（ところが、梅小路中納言と呼ばれた藤原 長方さまだけは、まったく遠慮もせずに、この（福原）京の欠点を挙げて、口も惜しまず手厳しくけなした。そうして、もとの（平安）京の美点を言っ、とうとうその日のうちに、かの（清盛という）人の決定によって、平安京へ還都しようということになってしまった。後で、その場に居合わせた上達部が、長方さまに会って、「それにしても呆れ（るほど驚かされ）たことだ。あれほどの気性の激しい人が、（自分では）素晴らしいと思っ、造営した都を、あれほどに（酷く）もどろしておっしゃったのか。（結果的には清盛公をなんとか）説得して還都の決定があったからよいようなものの、発言の甲斐もなく（清盛公が）怒りでもしたならば、いったいどうなさるおつもり（でいらっしやったのです）か」と言っ、（長方さまは）「その件を、私が（うまくいくだろうと）考えたのには、それなりの事情があるのです。（はつきり駄目だと言っほうが却って）清盛公の意向に沿うだろうと（考えて）こそ、あのよう言いました。そのわけは、広く中国・日本（の故事を）考察すると、（傍目に）感心できない新しいことを行っている者は、初めに（その新しいことを）思いついたときには、かえって他人に相談することはありません。（ところが後になって）その行いを少し後悔する気持ちのあるときに、他人に（評価を）問いただすものです。今回のことも、あの（福原）京がたいそう落ち着いた後で、二つの都の（優劣の）判定を行っただけから、（清盛公は）もはやこの（福原遷都の）ことが悔やまれるようになってしまったのだということを（私は）推察した

のです。だから、どうして言い方を手加減する必要がありませんか（、いいえ、そんな必要はなかったのです）」とおっしゃったということです。実際に、その後で（長方さまが昇進について）他人に先を越されようとしたときも、この清盛入道が、「長方さまにとつて）よいように申して、「長方どのは格別に物事をよく弁えている人である。簡単に他人に頭越しの昇進をさせるわけにはゆかない」と（言つ）て、後々までも（長方さまを鼻直しして）味方をなさったのである。梅小路中納言の両京の定めと（言つ）て、その（還都の）当時の人々の間で評判になったという。

解答

問1 ア 相当に身分のある貴族たち

イ 清盛に対して遠慮会釈もなく

ウ 清盛を説得して還都の決定があったからよいが

カ 都が平安京に戻った当時の人々の間でほめそやされた

問2 清盛が一人で断行した遷都について後になって人々に評価を求めたので、清盛が遷都を後悔していることを察したから。〔54

字・解答例〕

問3 他者と違って、清盛の権威や激しい気性に臆せず、自信を持って明確に考えを述べた長方に、好感を抱いたから。〔51字・解答

例〕

現代語訳

「情緒を愛して歌を詠む者は、昔から多くいるようですが、小野小町こそは、容姿も、ふるまいや心配りをはじめとして、どんな点でもすばらしかったのであろう、と思われまます。

色見えで……表に現れることはなく色あせ散ってしまうものは、世の中の人の心に咲く(恋という)花であることだなあ

わびぬれば……いま私はうつうつと思ひ悩んでいて、わが身を憂いものと思っているの、浮き草の根が切れて水に流れるように、悩みを絶つて、誘う人がいたらついていってしまおうと思ひます

思ひつつ……恋しく思ひながら寝たのであの方が夢に現れたのでしょうか、夢だと知っていたら醒めずにいたのに

(などと) 詠んだのも、女の歌はこのように(あるべきだ)、と思われて、わけもなく涙ぐんでしまいます。」と(私が)言うとき、また「(小野小町の)晩年は、とても嘆かわしいですね。それ「小野小町」ほどでない人でも、そんなにまで(みじめな晩年を)過ごすことはございませんのに」と言う人「女房」がいるので、(私が)「それについても、つらいこの世の無常が思い知られて、しみじみといたわしゅうございます。(小町は) 屍になつた後までも、

秋風の……秋風の吹くたびに、ああ目が痛い、ああ目が痛い。小野にだけとは言わず、(目の中にも) 薄が生えているよ。

などと詠んでいるようでございますよ。(この歌は) 広い野原の中に薄が生えておりましたものが、(風に吹かれて) このように聞こえたのでした。

(それを聞いた人が) たいそう気の毒に思つて、その薄を引き捨てました(その) 夜の夢に、『あの頭(小町)は、小野小町と申す者の頭です。薄が、風に吹かれるたびに、目が痛うございましたのに、(あなたが薄を) お取り捨てになつたので、たいそう嬉しゅうございます。この御礼に、歌を上手に詠めるようにしてさし上げましょう』と現れたとかいうことでございます。その夢を見た人は、道信の中将(である)と人が申しますのは、本当でございますか。(それにしても、小野小町以外の) 誰が、そのように(徹底した生き方を) し得ましようか。情緒の色をも匂いをも深く味わおうとするならば、(死後も) このようになりたいものです

ね」と言うと、(以下略)

解答

問1 ① 〓 ころづかい

④ 〓 さめ

問2 ② 〓 接続助詞・仮定条件を表す

③ 〓 過去の助動詞・「き」の未然形

問3 「恋」を花にたとえたもの。

問4 恋しく思いながら寝たのであの方が夢に現れたのでしょうか。

問5 (3) わけもなく / むやみに〔別解〕

(4) いやだ / 不快だ・いとわしい〔別解〕

問6 (屍になった) 小野小町が、嬉しいと感じている。

問7 女性たちが自ら、恋に生き歌に生きた女性の典型を求め、晩年は悲惨な死もあるが、死後も歌を捨てない小町の執念と徹底した生き方を評価しようとしている。〔72字・解答例〕

問1 読みの問題。①は「心」＋「遣ふ」の複合語で、連用形からの転成名詞である。「心遣ひ」は、「心を遣ふこと」の意で、「他人などに気を遣う」「心配り」「気遣い」のことである。

④は基本動詞。「覚む」と表記することもある。「覚醒」という熟語を思い浮かべよう。「醒む」には、ほかに「平静になる」の意もあり、「(薫は浮舟を) 焦がるる胸も、少し醒むる心地し給ひける(「思ひ焦がれる胸も、少々平静になる気持ちがなさるのであった」(『源氏物語』)) というふうに使われる。古文では「目が醒める意」として、他に「おどろく」という語が用いられることも少なくない。例えば、「(光源氏は) 少し大殿籠り入りけるに、蛸のはなやかに鳴くにおどろき給ひて(「少しおやすみになられたが、ヒグラシがにぎやかに鳴くのを目を醒ましになって」(『源氏物語』)) などと使われる。ここは「さめざらましを」と、歌の調べを整えるために、あえてこの語が選ばれたのであろう。

問2 文法説明問題。「文法的に説明しなさい」とあった場合、まず品詞を、次にそれが活用する語ならば、その基本形と文中での活用

用形を、そして助詞の場合は何助詞か(「助詞の種類」)を、助動詞の場合は、ここではどんな意味で使われているのか(「文法的意味」)を、あわせて記す。傍線部②・③とも一語であるが、二語以上の場合品詞分解をしたうえで以上の手順で説明すればよい。

傍線部②「ば」は、接続助詞である。活用はしないが、未然形に接続している場合は仮定条件、已然形に接続していれば確定条件を表す。ここは「ば」の直前の語が、「あら」というラ変動詞の未然形なので、仮定条件となる。

傍線部③「せ」は、②とは逆に下に「ば」が来るので未然形または已然形である。「知り／せ／ば」という形が結句の「まし／を」と対応し、反実仮想の構文(もし……だったら……たのに)の構文となっている。「せば」はほとんどが「まし」と対応する場合に用いられ、「未然形＋ば」の仮定条件となるのである。よって、活用形は未然形。また、未然形の「せ」は、サ変動詞「す」という考え方と、過去の助動詞「き」という考え方とがある。難しい問題だが、現在は後者の考え方が通説となっているので、従っておきたい。また、この「せ」は、奈良時代と平安時代の和歌の中にだけ用いられた。用例としては、「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし(「この世の中に、もし、まったく桜というものがなかったとしたら、春の人の心はのんびりしていたらろくなあ」という『古今集』の和歌が有名である)。

問3 内容説明問題。「何を花にたとえたものか」という問いから、比喩表現の説明を求められていることがわかる。傍線部(1)は和歌

の一部なので、和歌の文脈に沿って言葉を補い、たとえられているものを導く。歌全体の構造から見てみよう。初・二句「色見え
で移ろふものは」と提示し、三・四・結句「世の中の人の心の花にぞありける」と謎解きするような構成となっている。「色が表
に現れずに」「うつろふ(＝色あせ散つてしまふ)」ものといえは何? という問いかけに対し、「それは世の中の人の心の花(＝
心に咲く花)でしたよ」と解いてみせるのである。「恋の花咲く」といった言い回しをどこかで聞いたこともあるだろうが、「恋
心」を「花」に例え、その「花」も自然の花と同じように「うつろふ」ものであると嘆いている歌なのである。

王朝和歌の大きな主題は二つある。「四季」と「恋」である。『古今集』では、全二十巻のうち、「四季」部が六巻、「恋」部が五
巻を占めている。小野小町は六歌仙の一人で古今集仮名序にとりあげられた女流歌人の代表でもあった。

問4 現代語訳の問題。傍線部訳の問題は必ず品詞分解をし、単語の意味、文法事項を頭に思い浮かべ、最後に全体が文脈上どんな位

置にあるかをよく考えて表現する。

傍線部を品詞に分解すると、「思ひ／つつ／寝れ／ば／や／人／の／見え／つ／らむ」のようになる。品詞分解のうえで注意し
なければならぬ箇所は、「寝れ／ば／や」の「ば」と「や」、「見え／つ／らむ」の「つ」と「らむ」である。

「思ふ」は「恋しい相手を思う」の意。「寝れ／ば」は、動詞「寝」の已然形＋「ば」で、確定条件となり「寝たので」の意。
「や」は係助詞。「らむ」との係り結びが成立している。

「ば」と「や」で、「ばや」という終助詞(願望)があるが、この語は未然形接続であり、「寝れ」が已然形であることに注意す
れば、「ば」と「や」に切ることができる。

ちなみに、「心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花(『古今集』・百人一首にも所収)」の場合はどうなるだろう
か。これも「折ら／ば／や／折ら／む」が正しい。これは「もし折るとしたら折ろうか」の意である。和歌の意味は、「初霜が置
いて一面真っ白で、どれがそれかわからないほど私を惑わせている白菊の花を、『折らばや折らむ(＝折るなら折ろうか)』と
言っている。この場合は「未然形＋ば」であるから、より一層「ばや」との区別が難しい。「や……む」の係り結び(疑問)に気
づくとともに、歌全体の構造(句切れ)への着眼が必要となる。

傍線部の説明にもどる。「人」は「恋しい人」の意。「の」は主格の格助詞で「が」と訳す。「見え／つ」の「つ」は完了の助動

詞。「らむ」は現在推量の助動詞で連体形。ここで係り結びとなり、三句切れとなっている。「や……らむ」で、「……だろうか」という疑問文になる。「つ／らむ」は、「らむ」という終止形接続の助動詞を知っていれば、正しく切ることができる。

問5 単語の意味の問題。(3)・(4)ともに単語としての知識も必要だが、文節の役割に合わせた訳を書くこと。

(3)「そぞろに」は、「そぞろなり」(形容動詞)の連用形で漢字表記は「漫」。「すすろ」という語形もあるが同義である。基本的には「これといったはつきりした根拠や原因がないままに、事や心が進むさまを表す」のである。ここから口語訳は、「なんということもない・関係がない」「むやみに・やたらに」の二つにまとめることができる。「涙ぐましく」に接続する連用形だから、意味も連用形で書く。

(4)「うたて」は、「事態や気持ちがどんどん進行するさま」から「悪い方向に進むのを不快に思う気持ち」をいうことが多い。口語訳としては「気味が悪い・不快だ・気にくわない」などが多い。本文では、小町の「老いの果て」を「うたて」と言っているので、嫌悪感をあらわす言葉ならたいいていの表現があてはまる。

なお、用法によって「うたてし」を形容詞、「うたて」を副詞とするのが一般的であるが、本質的には同じ言葉である。これは、(3)の「そぞろに」を副詞とするか形容動詞とするかの相違も同様であって、ここではそうした品詞の違いは問題にされていない。

問6 心情の主を問う問題。こういう問題は、傍線部の前から動作主・会話主などをはつきりと補って訳してくるとわかりやすい。問題全文から気づいたであろうが、この場面は多くの会話文から成っており、現代語訳に「」で示した通りである。傍線部(5)の前をたどると、1行前に「その薄を引き捨て侍りける夜の夢に」とあって、傍線部(5)は夢の中の会話文であることがわかる。

「かの頭をば、小野小町と申す者の頭なり」と説明したのち、「薄の、風に吹かるるたびごとに、目の痛く侍るに、引き捨て給ひたるなむ(＝薄が、風に吹かれるたびごとに、目が痛うございましたのに、引き捨ててくださったので)、いとうれしき」と、自ら小野小町の化身であることを告げている。

問7 問題文全体の内容から要旨を読み取り説明する問題。設問文に「小野小町を例にして、この憂き世を生きる支えとして何を求め、

何を評価しようとしているのですか」とあり、これが解答作成のための土台である。まず、これを利用して本文に分析を加えてい

く。そして、「何を求め、何を評価」という箇所にあてはまる内容を本文中から見つけ、最後に字数を七十字前後に調整しつつ設問文の質問形式に合わせて完成させるという手順になる。

それでは、まず、本文の「小野小町」について書かれている部分に分析を加えてみよう。本文1行目に、「小野小町こそ、〜」とあって、小町の特徴・個性・評価などがまとまっていることがわかる。これは、ある人物（「作者」）の最初の発言である。この発言は、本文冒頭「色を好み歌を詠む者、」から、6行目「そぞろに涙ぐましくこそ」までになる。この発言では、「小野小町こそ……何事もいみじかりけむ」と、小町が女性としてあらゆる点ですぐれていたということとを述べ、そして、三首の「恋」を主題にした和歌を並べて、それに対して、「女の歌はかやうにこそ、とおぼえて、そぞろに涙ぐましく」と評価し、「恋」と「歌」に生きた女性への絶賛の言葉があるとみることができ。したがって、この本文の前半部には「恋に生き歌に生きた女性の典型」が示されているといえよう。これが、設問文の「問題文は、小野小町を例にして、この憂き世を生きる支えとして何を求め」たのかに該当する答えの核となる部分である。設問文の「問題文は」も、「問題文中に登場し発言する女性たちは」と言い換えることができるので、女性たち自身による小野小町の、女性としての典型・理想像といったものが述べられていることになる。女性は、「憂き世を生きる支え」として小野小町的な生き方（「恋と歌に生きる人生」）にあこがれたわけである。

さて、本文の後半、6行目に、「また、老いの果てこそ、〜」と、別の女性らしい人物によって小町の晩年のみじめな姿に話題が及ぶと、それを受けて、「それについても、憂き世の」から始まり、最終行まで、小町の晩年・死後の落魄ぶりを語る人物が話をしめくくる。話し合う女性たちにとって、この後半の部分がよりいっそう小野小町の女性としての徹底した生き方への共感を呼んでいるようなのである。

本文最後から二行「誰かは、さることあるな。色をも香をも心にしむとならば、かやうにこそあらまほしけれ」の「かやうに」は、「死後もこのように歌を捨てない」といった意味であり、女性としての生き方を死後も徹底して貫いたという解釈であり、そうした評価が「あらまほし」なのである。後半部の、小町の死後の逸話はあまりに残酷な話である。若き日の美女が生きながらえ、老婆になり、無残な死骸となるという言い伝えは、もともと仏教の教理を説くために都合のよいものであったために広まったらしいのだが、この『無名草子』においては、女性が恋と歌に生き「死後もその生き方を貫いたこと」への評価となっている。これが、設問文の後半「何を評価しようとしているのですか」に対応する答えの核となるのである。

それぞれの答えを組み合わせると、「女性たちが自ら」「恋に生き歌に生きた女性の典型を求め」「晩年は悲惨な死もあるが、死

後も歌を捨てない小町の執念と徹底した生き方を評価しようとしている。」との解答に至ることができる。字数は七十字前後とあり、あまり気にせずに四捨五入して七十字になるようにしておけばよいだろう。

出典：『続墨客揮犀』／ 東京大学 66年

書き下し文

余が友 劉伯時、嘗て淮西の士人楊勣に見ゆ。自ら言へらく、中年にして異疾を得、發言応答する毎に、腹中輒ち小聲の之に効ふ有り。数年の間、其の声浸大なり。道士有りて見て驚きて曰く、「此れ応声虫なり。久しく治せざれば、延きて妻子に及ばん。宜しく本草を読むべし。虫の応ぜざる所の者に遇はば当に取りて之を服すべし」と。勣言のごとくす。讀みて雷丸に至れば、虫忽ち声無し。乃ち頓に数粒を餌せば遂に愈ゆ。余始め未だ以て信と為さず。其の後長汀に至り、一丐者に遇ふ。亦た是の疾有り。環りて觀る者甚だ衆し。因りて之に教へて雷丸を服せしめんとす。丐者謝して曰く、「某貧にして他技無し。衣食を人に求むる所以の者は、唯だ此を借るのみ」と。

現代語訳

我が友人劉伯時は、以前淮水の西方地域の官吏楊勣に会った。(楊勣が)自ら(の体験談として)言うには、四十歳前後に奇妙な病にかかって、言葉を発したり(何かに)答えたりすることに、(自分の)腹の中からすぐさま小さい声でそれに倣う(「復唱する」)ものがある。数年の間にその声が次第に大きくなる。(ある)道士がいて(それを)見て驚いて言う、「それは応声虫だ。そのまま療治しないでいると、(それが周りの者を)引き寄せて妻子に及ぶだろう(「妻子をはじめとする周りの者にも伝染するだろう」)。ぜひ本草(の書物)をお読みなさい。(所載の薬材の中で)虫が応えない(「復唱しない」)ものに出会ったら、必ず(その薬材を)手に入れてそれを服用しなさい」と。楊勣は言うとおりにした。(本草の書物を)読んで「雷丸」(の項目)に至ると、(応声)虫は急に声がなくなつた(「応えなくなつた」)。そこで一度に(雷丸)数粒を服すと、結局完治した(という話だつた)。私は始め(その応声虫の話を)

信用していなかった。その後長汀に行くことがあって、(たまたま)一人の物乞いに会った。(楊勵と)同様にその病にかかっていた。(腹の中から声が応ずるその物乞いを)取り囲んで観ている者が沢山いた。そこで(私は)その物乞いに(治療法を)教えて雷丸を服用させようとした。(しかし)物乞いは(私の教示を)辞退して言う、「私は貧しくて(この応声虫の見世物以外に)他の特技もありません。衣食を人に施してもらおう手段は、ただこれにすぎるほかないのです」と。

解答

問1 私が言葉を発したり何かに答えたりするたびに、私の腹の中からすぐ小さい声でそれに倣うものがある。〔49字・解答例〕

問2 本草の書物を音読して、腹の中から復唱する声のしない薬剤を服用することが応声虫を退治する方法だということ。〔52字・解答例〕

問3 (楊)勵

問4 物乞いの腹の中からその口真似の音がするのが面白いので、大勢の人々が物乞いを取り巻いて見物している様子。〔51字・解答例〕

問5 応声虫の見世物以外に生活の手段のない物乞いにとって、作者の提案を辞退せずそれに従って応声虫を退治すると、人々から施しを受ける方法を失ってしまうから。〔74字・解答例〕

出典：白居易「河南亂(乱)を經(経)て、關(関)内飢えに阻みてより、兄弟離散して各おの一處に在り。因りて月を望みて感ずること有り、聊か懷(懷)ふ所を書し、浮梁の大兄・於潜(潜)の七兄・烏江の十五兄に寄せ上り、兼せて符離及び下邳の弟妹に示す。」

『白氏文集』卷十三所収 / 千葉大学 前期 95年・改題

書き下し文

時難れ年飢えて世業空しく、
弟兄驕旅して各おの西東にあり。

田園寥落す干戈の後、
骨肉流離す道路の中。

影を弔して分れて千里の鴈と爲(為)り、
根より辭(辞)れて散じて九秋の蓬と作る。

共に明月を見て應(応)に涙を垂るべし。
一夜郷心五處に同じ。

現代語訳

「河南の地の内乱によって関内(函谷関より西の地域)は飢えに苦しみ、兄弟は離散してそれぞれ別の地に暮らしている。そこで、月を見て感慨を覚えたので、その思いを書きつけて、浮梁の長兄、於潜にいる七番目の兄、烏江にいる十五番目の兄に差し上げ、さらに符離と下邳にいる弟や妹たちにも見せた詩」

戦乱によって飢饉となり、先祖代々続けてきた仕事もなくなり、兄弟たちは旅に出てそれぞれ異郷の地で西東に別れて暮らしている。戦乱のちに田園は荒れ果て、われわれ兄弟は旅の空にさすらっている。

自分の孤独な姿を哀れみ眺めれば、群れを遠く離れてさすらう孤独な雁のようであり、根から離れて秋風に吹かれてあてどなくさまよう蓬のようである。

今夜ともにこの明月を見て誰もが涙しているに違いない。五箇所に別れて住んでいても、望郷の念は兄弟みな同じく抱いていることであろう。

解答

問1 離散して寄る辺のない孤独な境遇にある兄弟。〔解答例〕

問2 兄弟たちの今夜の居場所は五箇所に別れてはいても、望郷の念を抱く点ではみなきつと同じ気持ちにちがいない。〔解答例〕

問3 ともにめいげつをみてまさになみだをたるべし。

問4 詩型Ⅱ七言律詩 / 押韻の字Ⅱ空・東・中・蓬・同

解説

問1 まずこの詩のテーマを考えてみよう。詩題および第二句「弟兄羈旅各西東」から、「一家離散」を嘆いた詩であるとわかるはず。

また、この詩は律詩だから、傍線部(1)を含む第五句と傍線部(2)を含む第六句は対句である。第五句に「分」、第六句に「散」とあり、合わせて「分散」となることから、やはり「家族」、この場合は、「兄弟」が「分散」、すなわち互いに離別状態にあることがわかる。すると「千里鴈(雁)」も「九秋蓬」も離別してそれぞれ一人でいる兄弟のことを表していると判断できる。「鴈(雁)」と「蓬(根なし草)」は、「孤独な境遇」を暗示する、詩でよく使われる語。この知識がなくても、この詩の場合は、第五句「甲影」の注に、「極めて孤独なたとえ」とあり、ここから判断できるだろう。

まとめるポイントは二つ。一つは、「兄弟たちが離れ離れになった」という指摘。もう一つは、「孤独」とか「一人ぼっち」という境遇の指摘。これで十分だが、もう一つあえて加えるとすれば、第六句の「辞根」から、「本来は一箇所(「根」)で暮らすべき兄弟が、そこから離れて(「辞」)いるために、不安である」ということ、あるいは、まだ戦乱が続いている中で離別しているのだから、「次にどこへ行くかも定かではない」「寄る辺のない身の上」ということである。

漢詩の読解問題は往々にして、詩に直接書かれていないことを書かなければならない。読み取った内容、つまり、どう読めたかということを書く(選ぶ)のである。その際に重要なのは、① 論拠(本文中の解答の根拠となる箇所)の発見、② 論拠からの論理的推理、そして、③ 人間の一般的な思考・行動パターンからはずれない、ということである。①と②については述べてきた

通りだが、③は、例えば、この詩について、「仲の悪い兄弟もいるんじゃないか？」と考えてはいけないうことである。ここでは、「兄弟が離れ離れになると、兄弟全員が早く一緒に暮らせることを願う」という一般的な思考パターンからはずれた解釈をしてはならない。

問2

この詩は、一句あたり七文字だから、七言詩である。七言詩は、一句を「二字／二字／三字」で切って読む。これは、リズムの切れ目とともに、意味の切れ目でもある。すると傍線部(4)は、「一夜」「郷心」「五處同」と、意味を分けることが出来る。

「郷心」は、下の注に「故郷を思う気持ち」とある。「望郷の念」と短い表現に直す。

「一夜」は「ある夜」の意味だが、ここでは、「今日この夜」つまり「今夜」で良いだろう。詩の前に書かれた詩題に「望月有感、聊書所懷」と書いてあり、「所懷」の内容がこの詩であるからだ。

「五處同」は、「五處」が何かわかれば簡単。詩題に、「浮梁大兄」「於潛七兄」「烏江十五兄」とまず三人紹介してあり、次に「符離及下邳弟妹」と二人いることが書かれている。兄弟は合計五人、つまり五箇所である。これが「五處」に相応する。

そこで、逐語訳すると、「今夜望郷の念は五箇所で同じ」となる。

これに省略された語を補い、前後の文脈から状況をつけ加えると次のようになる。

「〔兄弟たちは〕今夜、（それぞれ居る所は）五箇所に（別バラバラだが）、望郷の念（を抱くことは皆）同じだろう」。

括弧の中が省略された語だが、主語は「兄弟たち」。「五處」は、「今夜いる場所」という意味を補うとわかりやすくなる。「望郷の念」に「抱く」という述語を付け加えた。「皆」は「全員一人も欠ける所もない」という意味。傍線を引いた「だろう」は、作者の白居易は、当然のことながら、兄弟の様子を目の前で見ているわけではないので、推量を示す「だろう」を付け加えた。〔解答例〕で、「きつと……にちがいない」と強い推量になっているのは、第七句（傍線部③）の「應（応）」（まさニ……すベシ）が、第八句までかかると考えたからである。これは「二句で一文」の原理から考えたもので、第七句の「強い推量」が、第八句にもそのままかかると考えた。しかし、解答としては、「だろう」でも許容。

問3

白文を書き下し文にする問題だが、返り点は付いているので楽。まず動詞を探すと、「看」と「垂」。「看」の上の「共」は、返り点がないことから副詞とわかる。読みは「ともニ」で良い。「垂」の上の「應（応）」は再読文字「まさニ……」（終止形／ラ変型

活用語——連体形)ベシ。「垂」は下に「涙」があることから、「流す」という意味だとわかるだろう。そこで「たれ」と読む。「涙」は目的語となり、「涙ヲ」となる。ここで、「涙を」なら「垂らす」ではないかと考える人もいるだろう。「垂らす」は現代語なのである。「垂る」は、古語の場合、四段活用ならば自動詞であるが、下二段ならば他動詞になる。「看」は「みる」だが、下に続くので、連用形にして「みて」とする。

したがって、傍線部(3)は、「共に明月を看て應に涙を垂るべし(……「共^{ども}看^み明月^{ツキ}應^{まさ}に垂^た涙^{なみ}。」)となる。

問4 形式と押韻の問題。押韻は詩の形式によって決まる。五言詩ならば、偶数句末、七言詩ならば、初句(第一句)と偶数句に韻が踏まれる。

この詩は、七言詩で、八句あるから律詩、形式上の名称は「七言律詩」。初句末「空」と偶数句末「東、中、蓬、同」が押韻の字。すべて音読みにして、「クウ」「トウ」「チュウ」「ホウ」「ドウ」と、語尾の「ウ」の部分が共通していることも一応確認しておこう。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--